

「仏法は聴聞にきわまることなり」

里雄 敬意

仏法では聴聞という事を大切にします。蓮如上人は「ただ、仏法は、聴聞にきわまることなり」（真宗聖典 889 ページ）とされています。つまり「聴くということに尽きる」ということです。

仏の願い（おこころ）というものを我々はわからない、聞こえない。だからこそ、「聞こえる」まで身を入れて聴く、耳を傾けて何度も何度も聴くという事が大切なのでしょう。

このことは、生活の中でも同じことがいえるのではないのでしょうか？一方的に自分の事ばかり話をする人に会うと疲れてしまいます。でもこのことは他人ごとではありませんね。他人の事はよく気付き、目につくだけであって、「聴く」ということができなく、自分の事ばかりを言い、お互いに自分の立場や思いを主張し合い、譲り合うことがないのが私たちの姿、世界なのではないのでしょうか？

自己を中心にして、相手の気持ちを聴き、譲り合い、相手の気持ちを押し量ることがありません。そこには人が見えなくなり、いなくなる。仏教ではこのような世界を「地獄」と言われています。

戦後 69 年が経ちました。東北大震災から 3 年が過ぎました。「戦後から戦前に戻りつつある」という指摘があります。又、震災後から震災前になってきているのが現在の姿ではないのでしょうか？その時の悲しみやねがい、思いをすっかり忘れ、見失い、自分たちだけの立場に立って主張し、もっともっと経済的に豊かに、快適に暮らせるようにということばかりが重要な事として進んでいます。

だからこそ戦争で命を落とされた方、震災で亡くなられた方、いまだに故郷に戻れない方、その方々を忘れず、願いや気持ち、声が聞こえるまで、我々は耳を傾けて、心を入れて聴き続けていくということが大切なことであり、しなければならぬことではないかと感じます。